

# 日本人のイスラーム理解のために

塩尻 和子

東京国際大学特命教授

東京国際大学国際交流研究所長

筑波大学名誉教授

人文学部異文化交流研究施設第 32 回講演会

2017 年 7 月 12 日

## はじめに

イスラームは日本人とは縁のない、遠い砂漠の遊牧民の宗教である、と思っている方々が多いかと思えます。西暦 610 年にアラビア半島の商業都市マッカ（メッカ）で発生したイスラームは、当初から世界宗教としての特徴を持っていたために、預言者ムハンマドの死後、百年もたたないうちに東は中央アジアから中国、西はイベリア半島までの広大な地域に広まっていきました。その驚異的な伝播の最大の理由は、イスラームの教義が宗教として特異なものではなく、キリスト教にも仏教にも共通する教義を持っていたことにあります。その中には、日本の伝統的な社会道徳観や家族観、相互扶助の精神や政治倫理などに通じる教えがたくさん、見られます。



3つの一神教の聖地、エルサムの全景

イスラームは、ユダヤ教、キリスト教という「セム系一神教」の伝統の上に成立した宗教ですので、イスラームの人間観・世界観はユダヤ教・キリスト教の思想を受け継いだものであり、一神教の立場としては特別なものではありません。数年前に聖心女子大学でイスラームの人間観について講演をした際に、ある教授が「キリスト教の話をされたように聞こえた」とコメントされたことを思い出します。同じ系統に属する一神教であり、

同じ神を信仰し、同類の聖書を奉じる宗教であるかぎり、ユダヤ教、キリスト教、イスラームには互いに共通する教義があることは、むしろ、当然のことです。

その「おなじ神」を、イスラームでは「アッラー」と記載されることが多いのですが、これはアラビア語で **The God** という意味であり、アッラーという名前を持った神を崇拝しているわけではありません。ユダヤ教、キリスト教と同じ「神」を信仰しているのです。

イスラームの教えを要約しますと、「神への服従、平等、相互扶助」となります。「神への服従」というと、盲目的に神に従う、というイメージがありますが、実は、これはどの宗教にも共通する教えです。仏教では「仏への絶対帰依」と言いますが、信仰対象に従うことが「宗教」ですので、イスラームだけに特別な思想ではありません。

現在、世界のイスラーム教徒ムスリム人口は、16 億～20 億人と推定されており、世界人口の約 30% を占めています。つまり 3 人に一人がムスリムだということになるでしょう。ムスリム人口は、アラ

ブ地域よりもインドネシアやマレーシアといった東南アジアに多く、今や、イスラームは「アジアの宗教」となっています。

西洋キリスト教世界から発せられる深刻なイスラームフォビア（イスラーム嫌い）が蔓延する中にありながら、近い将来、キリスト教徒の数を超えて、世界第一位の宗教勢力になる可能性が高いといわれています。

イスラームフォビアとは、イスラームがユダヤ教、キリスト教に次いで同一の伝統上に最後に出現した宗教であることから、その正統性への疑義や非難から始まった蔑視や敵愾心を指す用語です。7世紀から8世紀にかけてのイスラーム政権の急激な版図拡大も、ビザンツ帝国や西ローマ帝国などのキリスト教世界には大きな脅威となったために、イスラームはキリスト教の異端であり、好戦的な宗教であるとして「右手にクルアーン（コーラン）、左手に剣」といった悪意に満ちた宣伝が行われてきたのです。西暦610年に発祥して以降、イスラームが外側から偏見と誤解をもたずに眺められるということは、ほとんどなかったのですが、それにもかかわらず、イスラームは瞬く間に世界に広がりつづけたのです。

もし、本当にイスラームという宗教が、非人間的で野蛮な教えを広める宗教であれば、1400年の歴史を生き抜いて、今日もなお、多くの信者を惹きつける世界宗教として存在することはできなかったでしょう。

## 1 イスラームは後進的な宗教か？

イスラーム世界から遠い日本では、イスラームに関する知識やニュースの多くは、いまだに欧米のメディアを通してもたらされています。欧米キリスト教世界には、伝統的に反イスラームの空気が存在していますので、世界中で発生するほとんどすべての混乱や攻撃の要因をイスラームの宗教性に求めてしまいます。そこで、私たちにも、「イスラームは野蛮な暴力主義の宗教」であり、イスラーム教徒ムスリムは、「いつも喧嘩ばかりしていて好戦的な人々である」という間違っただけの偏見が伝わってきています。

たしかにムスリムの多くは、現在の欧米の政策を不平等な政策であるとして激しく批判しています。特に移民として欧米で暮らす若者たちの多くは、それぞれの社会で受ける根深い差別意識に苦しみ、将来に希望や生きがいを持つことができないでいます。

とりわけ中東イスラーム世界は、いつも戦争や民族紛争、内乱やクーデタなどが発生して混乱している、とみられることが多いのですが、このような事態は、実は1922年のオスマン帝国滅亡前後から始まったヨーロッパ列強による暴力的な植民地支配に端を発しており、特に1948年にイスラエルが強引に独立したことによって勃発した4度にわたる中東戦争の後遺症だともいえることができます。第一次世界大戦から今日に至る100年間の中東現代史の流れの中で、ヨーロッパ列強による恣意的な支配と強引な搾取に翻弄されてきた人々の心の奥には、今でも欧米に対する敵愾心は消えてはいません。

しかし、その対抗手段として行われる一部の過激派によるテロや暴力に対しては、大多数のムスリムもイスラーム指導者たちも厳しく批判をしています。なぜならイスラームでは個別の暴力は否定されているからです。

よく「イスラームにはジハードという教義があるので、暴力や人殺しが容認されている」といったうわさを本気で信じている人がいますが、「ジハード」には二つの意味があり、第一の意味は「宗教的精神修養」をさしています。第二の意味は「郷土防衛」を指しますが、これはムスリムの郷土の外側

から外敵（異教徒）が攻めてきた場合に限られ、しかも、イスラーム世界の指導者であるカリフの命令によって、全ムスリムが同意して参戦することによって、はじめて成立する防衛戦争となります。その際、高齢者、婦女子、ユダヤ教やキリスト教の聖職者などの非戦闘員とは戦ってはならない、という厳しい戦時規定もついています。したがって、イスラーム史の中では、戦時規程の要件を満たした正式なジハードは発生したことがありません。過激な戦闘的集団がジハードを標榜するのは、自分たちの戦闘行為に大義名分を与えるための作戦にすぎません。

また、イスラームは「政教一致という教義を掲げているので、後進的である」という意見もよく耳にしますが、政教一致的ではない宗教はありません。哲学思想とは異なって、「宗教」は人間がその教義を社会の中で実施して初めて宗教になります。たとえ厳格な出家主義の宗教であっても、その教義は、やがて社会の中で生かされていきます。だから「政治も宗教も」はすべての宗教の原理なのです。

ヨーロッパ近代以降の政治思想として「政教分離」が謳われていますが、それは「政治的権力と宗教的権力が分かれる」ということを示していて、「政治や社会の基本理念が宗教的理念や理想から分離する」ことを示しているのではないのです。最近のアメリカのトランプ大統領の行動を見てみると、「政教一致」の政治手法が具体的に表れています。ある意味で宗教は社会の統合理念なので、政治の理想も、程度の差こそあれ、宗教的理想が政治・社会の中に実現されること、であり、この点は日本のように政治的側面から徹底的に宗教色を排そうとする国においても、例外ではありません。

たとえそうであっても、イスラーム世界はあらゆる面で遅れている、と強調する人もいます。それは、どのような面で「遅れている」のでしょうか。イスラーム地域の首都圏を訪問してみると、東京よりもさらに近代的な街並みに出会うでしょう。低所得層の家庭でも、日本の都市圏の住居よりはるかに広い家に住んでいます。どの国でも、長幼の序を尊び、貧しくても相互に助け合って、心豊かに暮らす人々に出会います。イスラームは後進的で非人間的な宗教だという考えは、それこそが時代遅れの偏見でしかありません。確かにイスラーム教徒の中には、貧しい人々も難民となって各地を逃げ惑う人々もいます。しかし、それは、それぞれの世界や地域の情勢によるもので、宗教に責任があることではありません。時代や政治的状况の変化によれば、いつでもだれでも、どの宗教を信じていても、自分の身の上に思いがけない不運が降りかかることがあります。

イスラーム世界は、8世紀から14世紀にかけて、世界で最も進歩した文明を打ち立て、今日に続く科学技術の基礎を築き上げました。化学・物理学・数学・工学・医学・薬学・光学・天文学などの学問領域だけでなく、現在、私たちが「西洋的なもの」だと考えている優雅な生活様式や料理、ファッション、エチケット、これらのすべては、実は中東地域やイベリア半島で栄えたイスラーム文明が、ピレネー山脈を越えてフランスやドイツ、イギリスなどへもたらされたものなのです。

「それなら、このような驚異的な文明を形成しながら、どうして今日のイスラーム世界は没落したのか」という質問も、よく受けます。歴史には浮き沈みがあります。ローマ帝国が永遠に栄えることがなかったように、イスラーム世界の栄光も、永遠ではなかったのです。ほぼ400年続いている現在の欧米の繁栄も、いつかはどこかの人々と交代する時代がくるでしょう。

## 2 一神教批判

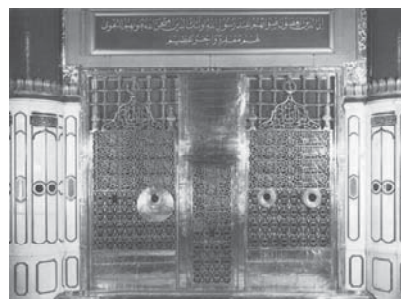
日本では最近、宗教学者の中には、ユダヤ教、キリスト教、イスラームのような一神教を厳しく批判する主張が出てくるようになりました。これらの学者たちの多くは、多種多様な仏像を崇拜する仏教や800万もの神々を擁する神道のような「多神教」は何でも受け入れる宗教で、寛容で包容力があり、人間的で優しい、と主張します。しかも、このような多神教は日本のように自然が豊かで温暖な

気候の地域に発生するが、砂漠地域で自然条件が厳しい中東のような地域には一つの神しか認めない厳格な一神教が発生するのだ、として自然環境や風土を要因として、多神教と一神教を区別しようとしています。しかも、一神教はえてして厳格で不寛容であり、好戦的だと批判しています。

しかし、よく考えてみれば、この図式には当てはまらないことがたくさん、あります。歴史を紐解いてみれば、多神教の世界が、常に寛容で平和的だということはできません。一例にすぎませんが、キリスト教を公認する前の多神教のローマ時代も、戦前の日本の国家神道も、過酷な戦争を興してきた歴史があります。また、峻厳な砂漠地域のインド亜大陸でも多神教のヒンドゥー教が興っています。

いっぽう、一神教が発生した中東地域にも、少ないのですが緑豊かな自然はあります。しかも、中東地域はエジプトでもメソポタミアでも、もともと多神教世界でしたので、ユダヤ民族が、周辺の多神崇拝を排して一神教を守ろうとする苦難の歴史はヘブライ語聖書（旧約聖書）に克明に描かれています。イスラームでも、宣教の当初、預言者ムハンマドが、自らが所属する部族から激しい迫害を受けたのは、彼が部族の伝統的な多神崇拝を排して一神教を唱えた点にもあるのです。つまり人間は唯一の神だけを崇拝するよりも、姿かたちを持った多くの神々を崇拝するほうが、はるかに容易だったのです。

しかし、ここで私が強調したいことは、どの宗教にも、「一神教的な要素と多神教的な要素」が入り混じっていることなのです。イスラームという厳格な一神教も、ムハンマド自身は普通の人間であるとして神格化されませんでした。ムハンマドが生きているうちから、多神教時代のアラビア半島の多くの風俗習慣を取りこんで体制化されていくことになりました。もちろん、イスラームの儀礼として採用された多神教の残滓は、イスラームのもとに新しい意味を与えられており、以前の多神崇拝のままのかたちで取り込まれたものではありませんが、そこに明らかに多神崇拝の要素が残っているのは、否めない事実なのです。特にイスラームでは、一神教の立場から複数の神を崇拝することは許されないことなのですが、民間信仰としては、それぞれの地域の聖者の墓所に現世利益をもとめて参詣するという聖者崇敬も多く見られ、柔軟な土着化も広範な伝播の要因となりました。



マディーナにある預言者ムハンマドの墓

わかりやすい例をあげれば、私たちがもともとキリスト教の祭りだと信じて疑わない世界的な行事、クリスマスやイースターなどは、実はローマやヨーロッパの多神教文化がキリスト教と習合したものであるのです。世界各地でいまなお盛んに行なわれている聖者崇敬も、一神教・多神教の区別なく存在し続けています。一方、多神教・偶像崇拝だとされる日本の仏教や神道の中にも、一神教と共通する教義が少なくありません。

このような現象を比較宗教学の見地から検討しますと、一神教と多神教を明確に区別することはできないのではないかと、私は考えています。一神教と多神教の区別や優劣を競うような見解には、問題があると思います。乱暴な言い方をすれば、「神」は「神々」であると同時に、「神々」は「神」であるということができると思います。そうでなければ、ユダヤ教もキリスト教もイスラームも、多神教の伝統や風俗習慣を、このように安易に大量に導入することはなかったでしょう。

### 3 イスラームの基本的教義

イスラームの概要を簡単にまとめますと、イスラームは西暦 610 年にアラビア半島の商業都市マッカ（メッカ）で発祥した世界宗教で、ユダヤ教、キリスト教と同じ伝統上の一神教です。1922 年オス

マン帝国が滅亡するまでは、文化的にも政治的にも世界の中心となっていました。発祥の当初から普遍的な宗教として、中東から中央アジア、東南アジア、アフリカ、東欧まで広がっています。

イスラームでは基本的な信条を守れば、地域の独自性を生かした土着化が認められています。そのため、例えばエジプトのイスラームと、マレーシアのイスラームはかなり違っていますが、問題視はされていません。また、大本山制度も教会制度もなく、信徒一人一人が決定権を持つとされています。正統派か異端かを区別して決定づける機関もありません。したがって、多数派（約 90%）のスナ派も少数派（約 10%）のシーア派も、どちらも正統と認められています。最近、スナ派とシーア派の抗争事件が報じられることが多いのですが、それは「宗教」の問題ではなく「政治的権力や経済的利権」の争奪問題が要因となっています。

先行するユダヤ教、キリスト教と同じ聖書を共有する宗教として、それらの信徒を「啓典の民」と認め、イスラーム社会の中で共存を確立してきました。この共存体制がほころびたのは、19世紀初頭から始まったヨーロッパ列強による植民地支配と、1948年のイスラエルの建国によって引き起こされた中東紛争が原因です。前述のように、他民族や諸文化の融合を図り、すたれていたギリシア科学を取り入れて、近代科学の基礎を築きました。

ここで、イスラームの基本的信条を説明します。これは「六信五行」と呼ばれます。

## 六 信

イスラームの基本的な教義と儀礼は「六信五行」にまとめられます。

「六信」とはイスラーム教徒ムスリムがその存在を信じなければならないもので、神、天使、聖典、預言者、来世、予定、です。

- ① 神——神とは、天地の創造主、宇宙の支配者である永遠なる唯一絶対の神であり、全知全能の人格神です。キリスト教の「神の子」思想と対比して「産みもせず生まれもしない神」とされます。神は人間による一切の表象を禁じており、旧約聖書にみられるような「人間は神の似姿」という考えはありません。したがって偶像崇拜を厳格に否定するために、モスクや礼拝室などの宗教的な場では音楽、肖像画、人物の彫刻なども排除されています。
- ② 天使——天使は神によって光から作られ、神の手足となって働く存在であり、神と人間の連絡役を果たしています。ムハンマドに神の言葉クルアーンを運んできたのは大天使ジブリエル（ガブリエル）です。クルアーンには超自然的存在として天使のほかに、火の出ない煙から創られたジン（幽鬼、精霊）、神に背き人間を誘惑する悪魔の存在も認められています。『千夜一夜』に出てくるランプの精などはこのジンだと言われています。クルアーンのなかでは、ジンは善悪双方の超自然的な能力をもち、人間と同様に扱われていますが、悪魔は天地の終末まで人間を惑わす悪事しか行なわないとされています。
- ③ 聖典——イスラームは神が天地を創造した時から人間に与えられた宗教だとされています。神はそれぞれの民に預言者と言葉をセットで与えたので、モーセの律法、ダビデの詩篇、イエスの福音書も神の言葉、つまり聖典です。しかし、以前に言葉を与えられた民は、それらを正しく理解せず歪曲してしまったので、ムハンマドには特に選ばれた言語アラビア語で記された最後の最高の言葉、クルアーンが与えられたとされます。
- ④ 預言者——クルアーンに登場するすべての預言者の存在を信じることです。クルアーンには原初の人間アーダム（アダム）をはじめとして新旧約聖書の預言者とアラブ人の預言者、計 25 名が紹介されています。預言者の中でも、特別に神の言葉を授かった者を使徒と呼び、

モーセ、ダビデ、イエス、ムハンマドが使徒とされます。中でも使徒ハンマドは預言者の封印、最後の最大の預言者です。

- ⑤ 来世——神が創造したこの世界はいつかかならず終って、時間のない永遠に続く来世がやってくるという終末論であり、人間の死後の復活を信じることです。来世は個々人が生きている時の意志と責任が厳密に問われる賞罰の場でもあり、生前の人間が自ら選んで行なった行為に応じて審判が実施され、善人には楽園が、悪人には火獄が用意されています。
- ⑥ 予定(定命)——宇宙・世界は神の計画と意思によって動いていると考えられることで、いわば宿命論です。ここでは神の全知全能性が強調されており、人間の意志や責任論の入り込む余地はありません。しかし、クルアーンには絶対的な神の予定と、「来世」を信じる際にみられる人間の自由意志と責任という、相反する立場が併存しています。この考えは宗教思想にはよくみられるものです。

## 五行

「五行」とはムスリムが行なわなければならない基本的な宗教儀礼のことで、信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼、の五つの儀礼を指します。

- ① 信仰告白(シャハーダ)——「神のほかには神はなく(ラー・イラーハ・イッラーラーハ)、ムハンマドは神の使徒である(ワ・ムハンマド・ラスールッ・ラーヒ)」という二つの言葉をアビア語で唱えることです。また、毎回の礼拝時にも必ずこのシャハーダを唱えます。「神のほかには神はない」だけでは、ユダヤ教、キリスト教の信仰告白と共通するので、イスラームの独自性を示すものとして第二文のムハンマドに関する文章が加えられました。イスラームの入信儀礼では成人男性二人以上の証人の前でこのシャハーダの言葉を唱えるだけであり、非常に簡単です。
- ② 礼拝(サラア、サラート)——義務の礼拝は、日没(マグリブ)、夕べ(イシャーア)、暁(ファジュル)、昼(ドゥハー)、午後(アスル)の一日五回、マッカの方角をむいて、アラビア語で行なわれます。金曜日の正午にモスクで行なわれる集団礼拝はもっとも価値があるとされています。礼拝は、定式に基づいて身を清めた後で、決まった手順と方法で行なわれますので、世界中、どこへ行っても、アラビア語が分からなくても、礼拝に参加できるという利点もあります。モスクの集団礼拝では礼拝の指導者(イマーム)が先導することが多いのですが、指導者も会衆も全員がマッカの方角(キブラ)を向いて礼拝するという点が、聖職者組織を採らないイスラームの平等性を表しています。
- ③ 喜捨(ザカー、ザカート)——自主的な布施ではなく義務の献金で、「定められた喜捨」ともいわれます。一年間の収入に対して一定の税率が決まっているので、宗教税ともよばれますが、金銭だけでなく農産物や家畜、商品などで納税することもできます。用途は、寡婦や孤児、物乞いや貧しい巡礼者などの困窮者の救済や信者の相互扶助などです。喜捨の義務は、信徒同士の相互扶助が義務となっていることを示しています。自主的な献金は「サダカ」と呼ばれ、ザカートとは区別されます。モスクやモスク付属学校などの建設や維持に費やされる費用のほうは「ワクフ」という自発的な寄進制度から運用されます。
- ④ 断食(サウム)——イスラーム暦(ヒジュラ暦)第9月(ラマダーン月)の一月間に、日の出から日没まで、飲食を絶つとともに喫煙、性交などの人間的な欲望から身を清めることで「齋戒」の行です。信者は喉の渇きを耐え忍びながら、神の日ごろの恩恵への感謝と、

貧者への思いやりを涵養します。ほぼ 10 歳までの子ども、病人、妊産婦、旅人、戦闘中の兵士などは断食を免除されますが、成人は免除期間が終われば断食をしなかった日数だけ、断食の埋め合わせをすることが奨励されています。

- ⑤ 巡礼（ハッジ）——これまでの四つの行はすべての信徒に義務づけられていますが、義務としての巡礼は「そこに旅をする能力のある者」に課せられる義務で、肉体的、金銭的にマッカまで旅行することが可能な者が一生に一度行なえばよいとされています。もちろん、巡礼をする能力のある者は何度行ってもいいのです。義務の巡礼とは、第 12 月（巡礼月）の 8 日から 13 日までに、決められた方法でマッカのカアバ神殿に参詣することです。交通手段が発達した現在では毎年、300 万人以上のムスリムが世界の各地から集まり、ほぼ同時に一定の儀礼を行ないますので、その光景はじつに壮観です。義務の巡礼を済ませた者はハーージュ（女性はハーージュ）と尊称されます。巡礼者は巡礼儀礼の前後にマディーナの預言者モスクにも参詣します。預言者モスクは、ムハンマドの晩年の住居であった場所に建設された巨大なモスクで、構内にムハンマドと第 1 代、第 2 代のカリフの 3 人の墓所があります。義務の巡礼期間以外の時期にマッカのカアバ神殿に詣でることは「小巡礼（ウムラ）」といわれ、これを何度行なっても義務の巡礼を果たしたことにはなりません。マッカとマディーナは特別な聖地であり、ムスリムでなければ訪れることはできません



マッカのカアバ神殿域  
（巡礼時の光景）

#### 4 イスラーム社会の特色

これらの「六信五行」の教義は、イスラームの基本的な教義ですので、これを遵守している限り、ほかにどのような要素や特色が追加されてもイスラームはその宗教性を保つことができます。ですから、一般に流布しているイスラームの特徴として、「豚肉を食べない、アルコールを摂取しない」「女性はベールを被る」などの、目に見える「イスラーム的な要素」が目立ちますが、これらはそれぞれの時代や地域の信者の解釈として採用されている戒律です。上記の「六信五行」は、まさに原理原則に過ぎず、これだけでは、日々の信仰生活を送るうえでは、何をどのように行えばよいのか、という指針や規範にはなりません。そこで、ムスリムの指導者たちは、クルアーンや、預言者の生前の言行録「ハディース」に基づいて、詳細な行動規範を形成して、信者に示してきたのです。

その内容は「イスラーム法」と呼ばれる宗教的戒律となりますが、伝播の地域の伝統・習慣・文化や政治情勢、それぞれの時代の風潮などによっても、解釈が大きく変化していくことになります。例えばイスラームの特徴として批判的に取り上げられる「4 人妻の教えや女性差別」なども、このような地域や時代の要求や変化によって変わってくるものなのです。

「4 人妻の問題」はイスラームの草創期の歴史的な事情によって下された啓示に基づいた教義で、当時の社会に蔓延していた多妻婚を戒めて、「多くても 4 人まで」と規制した規範でもあります。

クルアーン第 4 章婦人章 3 節には以下のような章句があります。

「あなたがたがもし孤児に対し、公正にしてやれそうにもないならば、あなたがたがよいと思う 2 人、3 人または 4 人の女を娶れ。だが公平にしてやれそうにもないならば、只 1 人だけ（娶るか）、またはあなたがたの右手が所有する者（奴隷の女）で我慢しておきなさい。

このことは不公正を避けるため、もっとも公正である。」

イスラームの草創期には、イスラームを受け入れない近隣部族との抗争事件が頻発しており、多くの成人男性が戦死したとされています。そこで、未熟なイスラーム社会に残された未亡人や孤児（片親がいない子供も孤児と呼ぶ）を救済するために、上記の啓示が与えられたとされています。複数の妻を娶った男性には、愛情も生活扶養も住環境も、すべて平等にしなければならないと命じられていますので、実際に複数の妻を娶る男性は多くはなかったようです。我が国でも近代以前の社会で、宮廷や武士階級などでは中宮や側室を置くという習慣もあったことを考えるなら、イスラーム社会の4人妻の規範は珍しいものではないと思えます。現在ではほとんどのムスリム家庭では一夫一妻がおこなわれていて、イスラーム圏のトルコやチュニジアなどでは憲法で多妻が禁止されています。

また、イスラームでは根強い女性差別が横行している、と言われることが多いのですが、7世紀初頭のアラビア半島で、男性の二分の一でしたが、「妻に相続権」を認めたのは、世界でイスラームが最初のことでした。7世紀初頭の世界では、アラビア半島はいうまでもなく世界中で女性の財産権に対する配慮など、特別な例を除いてはほとんどなかったことを考えますと、この規定には女性の生活権を保護しようとする画期的な意図がみられます。しかも、世界中で「妻の相続権」が認められたのは、現代になってからのことなのです。

したがって「女性差別」は、現在でもどの宗教にも、またどの国にも、社会制度を問わず見られる問題です。翻って、我が国をみれば、一見して多くの男女がそれぞれに自由に自己の生き方を選んでいるように見えますが、世界経済フォーラム(WEF)が発表した2017年の世界144カ国の男女格差(ジェンダー・ギャップ指数)によれば、日本は114でした。これは、先進7カ国の中でも日本の男女平等度が最も低いことを示しています。その低評価の原因として、経済と政治の分野における女性の進出が著しく遅れていることが挙げられています。日本は、イスラーム圏のカザフスタン、タジキスタン、バングラデシュ、ブルネイ、マレーシアよりも下位なのです。

さらに、イスラームは「政教一致」体制を取っているから後進的なのだ、という批判も多く耳にします。しかし、考えてみてください。世界の宗教の中で、「純粋に政治と関わっていない宗教」など、存在していないのです。哲学思想とは異なって、「宗教」は人間が主体となって実施しない限り、「宗教」とはならないのです。そこで、いかに精神性を重要視する宗教であっても、現実社会の中では、宗教と政治が相互に深くかかわるという事態を免れることはできません。あらゆる宗教は、「宗教的理想と政治的理想が一致することを理想とする」からです。イスラームは当初からこの事実を明らかにして、宗教的理想が人間の日常の生活から、政治経済、国際関係まで一致していることが重要だと考えているのです。しかし、政治的権力と宗教的権威が一致すること、あるいは、中世のヨーロッパのように、宗教者が政治を操ることを教義としているのではないのです。「政教一致」はあくまでも宗教上の理想なのです。一部の過激派が自分たちの正統性や大義名分を標榜するために宗教を悪用することはあっても、イスラームが発祥してから1400年の歴史の中で、この理想は一度も実現したことがありません。

イスラームの社会性とは、聖職者組織や大本山制度を持たない在家の宗教であり、精神世界と世俗世界を区別し優劣をつけない点にあります。つまり、人間の日常生活こそが信仰生活であり修行の場だとされているのです。そして、聖職者や宗教上の権威者のいないイスラームでは、世界中の信徒が一つの宗教的共同体「ウンマ」の構成員となり、何かを決定する権威を持つ者は、実は、信徒一人一人なのです。つまり権威主義を否定し、信者一人一人に決定権が与えられているのです。



六信五行の3番目の義務の献金「ザカー」の箇所でも説明しましたが、相互扶助が義務となっていて、宗教の別を問わず、長幼の序や弱者救済、旅人への親切、日常の挨拶や礼儀作法が強調されています。こういった点は、日本古来の伝統的な道德観と変わりません。

教会制度や本山制度がないので、教区やメンバー制度も存在していません。モスクは誰にでも開放されていて、礼拝時でなくても、門は開かれています。ただ、近年では、テロなどを警戒して、礼拝時以外には門を閉じるところも出てきていますが、日本国内にある大小のモスクもほとんどの場合、信徒ではない人も自由に見学に訪れることができます。

## 5 イスラーム科学の発展

今日の科学技術の発展経路は、古代ギリシア科学がヨーロッパへ伝わり、13世紀末からイタリアで始まったルネサンスを契機として大きく発展して現在へつながっていると信じている人が多いようです。しかし、ギリシア文明末期からイタリアのルネサンスまでの間にはほぼ1000年の空白があります。現在でも多くの人々は、この長い空白の期間に、一旦は廃れたギリシア科学がイスラーム世界（最初はイラクや中央アジアで、後半はイベリア半島で）で受け継がれ再生し、さらに大発展を遂げたことを知りません。「後進的だ」と批判されるイスラーム世界は、実は8世紀から15世紀頃まで、大先進地域だったのです。

イスラーム科学の大発展を目の当たりにした当時の「遅れていたヨーロッパ」が、イスラーム科学を貪欲に吸収することがなければ、私たちは今日のような科学技術の粋を享受していたかどうか、わかりません。さらに、学問領域だけでなく、私たちが、イタリア、スペイン、フランスやイギリスから受け入れ学んだと思っている音楽・演劇という芸術文化、上品なマナー、洗練されたファッション、料理などの、日常生活を豊かにしてくれる工夫も、実はイスラーム世界で開発され美味い後にヨーロッパで発展したものでした。

ギリシア科学がイスラームに導入される契機となったのは、ローマ帝国がキリスト教を国教と定めた後の529年に、プラトンが創設し900年間も続いたギリシア科学の研究機関「アカデメイア」が、ローマ皇帝ユスティニアヌスによって「異教時代の多神崇拝の学院」であるとして閉鎖されたことです。それによって、ギリシアの科学者や哲学者たちと共に膨大な文献がトルコの山村やイランの地方都市などへ移されて保護されることになりました。やがて749年にイラクのバグダードを首都とするアッバース朝が興り、第7代のカリフ、マアムーンによって中世アラブ世界におけるもっとも有名な翻訳・研究機関となる「知恵の館」が建設されました。ここでカリフの号令一で、ギリシアの科学や哲学の文献収集とそのアラビア語への翻訳・研究という一大事業が展開しました。

イスラーム文明（アラビア文明）は近代文明の基礎となる世界史上の大融合文明でした。イスラームが興った時期には半ば廃れていたギリシア科学を中心に据え、インドや中国などの周辺地域の文化も縦横に取り込み、アラビア語で表現するという文明だったのです。

この間の歴史を簡単に説明しますと、イスラーム軍は640年以降、アラビア半島から北アフリカへ進攻し、さらに711年にはイベリア半島に進出しました。ダマスカスを都としたウマイヤ朝が滅びて749年にはバグダードを首都とするアッバース朝が成立しました。滅ぼされたウマイヤ朝の王子一行が密かに今のシリアからイベリア半島へと逃れ、アンダルシアの地で756年に後ウマイヤ朝を興しました。つまり711年から最後の王朝ナスル朝が1492年に崩壊するまでの約800年間、イベリア半島ではイスラーム支配下でユダヤ教やキリスト教との融合文化が発展したのです。

イラクを中心としたアッバース朝の下で隆盛を極めたイスラーム科学やアラブ文化がジブラルタル海峡をこえてイベリア半島へ流入したために 12～13 世紀のスペインのトレドは科学・医学・哲学などの学術の一大中心地となり、アラビア語・ギリシア語文献をラテン語に翻訳する作業が展開されました。ラテン語に翻訳されたギリシア語文献やイスラーム教徒の研究業績がピレネー山脈を越えて、フランスやイギリスへと運ばれて、ヨーロッパ中世の文化、科学の発展に寄与するとともに、スコラ哲学にも大きな影響を与えました。パリ大学やオックスフォード大学でもイスラーム哲学が盛んに学ばれましたが、市民生活の中にもイスラーム流の生活文化や香辛料の使い方、フランス料理の食卓マナー、サロンの習慣、医学療法、美容や健康の知識などまで取り込まれ、さらに洗練されたものになりました。つまり、私たちがヨーロッパから伝来したと信じて疑わない多くの生活文化は、実はイスラーム起源なのです。

今日のヨーロッパ語の中に、アルコール、アルジェブラ、アルカリ、キャンディ、コーヒー、コットン、シュガー、シャーベット、ライス、ケミストリーなど、多くのアラビア語起源の物質名や香料、植物名、学問名などが残っているのは、アラビア語で研究されたイスラーム科学の名残りなのです。また、算用数字を「アラビア数字」とも呼びますが、これはインド起源の数字をイスラーム世界で発展させて実用化したからで、フワーリズミーが世界で初めて方程式の教本を執筆して代数学（アルジェブラ）を発展させたことも知られています。そのほか、イスラーム科学で特筆される学問は医学で、特にイブン・スィナーやイブン・ルシュドが執筆した医学書はラテン語に翻訳されて、17 世紀に至るまで西洋の医科大学の教科書として使用されました。

今日まで、ギリシア語原典・アラビア語訳本・ラテン語訳本の多くが現存しており、研究者による解説・研究が続けられています。このような世界的な翻訳と研究の事業には、キリスト教徒・ユダヤ教徒・イスラーム教徒が一体となって共同作業に従事することによってはじめて可能となったのです。宗教が異なる人々が共同でこのような世界の発展に大きく貢献する事業を行うことができたのは、イスラーム支配者の「人類の利益になるものはたとえ宗教が異なっても、何であれ取り入れる」という柔軟な思想によるものでした。この態度は、アカデメイアを廃止したキリスト教下のローマ皇帝と比較すれば、どちらが人類の進歩と幸福に寄与するのか、明らかになるでしょう。

イスラーム文明の後期にあたりますが、世界に大きな影響を与えた技術の例をひとつ、挙げましょう。それは「ウルグ・ベクの天文台」の話です。



サマルカンドに残る  
ウルグ・ベクの天文台跡

中央アジアでは、ティムール朝第 4 代君主のスルタン、ウルグ・ベク（1394 - 1449）はウズベキスタンのサマルカンドに高度なレベルの天文台を建設し、多くの科学者を雇用して現代でも通用するほどの緻密な天文表を作成したことで学芸君主として知られています。天文台の内側には大理石を用いた半円形の観測器、つまり日時計が作られていました。簡単な装置と計算

だけで、ウルグ・ベク配下の学者たちは、太陽年（1 年間）を 365 日 5 時間 49 分 15 秒と観測し、その数値は今日の観測値よりわずかに 25 秒多かっただけでした。1525 年のコペルニクスの観測でも誤差は 30 秒であり、ウルグ・ベクの数値は、最近まで世界で最も正しい数値として、多くの暦の作成に用いられていたのです。

660 年にシリアのダマスカスに成立したウマイヤ朝は、アラブ人を重用したために「アラブ帝国」と呼ばれましたが、その宮廷の公用語がギリシア語であったことは興味深いことです。749 年に現在のイラクのバグダードに都をおいたアッバース朝は、人種や出自に関わらず、イスラーム教徒を中心

に展開した王朝でしたので「イスラーム帝国」と呼ばれました。

イスラーム帝国と呼ばれても、アッバース朝の支配地域には、周辺地域から実に様々な宗教や文化を背景にした多くの人々が集まってきていました。その中でも特筆されるのが、ユダヤ人との共存です。イスラーム支配下のユダヤ人に対する政策は、それぞれのカリフによって相違はありましたが、聖書を共有する「啓典の民」として、概して寛容なものでした。当時、バグダードにはイエシヴァと呼ばれるユダヤ教学院が 2, 3 校あり、学問上の権威を誇っていましたが、その運営経費は、アッバース朝の地方税からの補助とユダヤ教徒の献金で賄われていたのです。

中東地域に住むユダヤ人は日常的にはアラビア語を話すようになっていましたが、ギリシア文献のアラビア語翻訳事業によって学問上の言語もアラビア語に変わっていきました。バグダードのユダヤ教学院の発展によって、当時のバグダードはユダヤ教神学・哲学の世界的な中心地となりました。ユダヤ教において今日まで続く「ラビ・ユダヤ教」が成立したのはイスラーム支配下のバグダードにおいてであったことを考えると、文化や思想の発展と伝承には他宗教との協調関係がいかに重要かということが理解されます。ラビ・ユダヤ教の中心は 1258 年のアッバース朝の滅亡と前後して各地へ分散し、おもにヨーロッパへ移っていきましたが、その後のユダヤ人の運命を考えると、イスラーム支配下でユダヤ教徒との共存がいかに重要であったかが理解されます。

## 6 宗教戦争とはなにか——領土紛争の大義名分

イスラーム支配下では、当時の為政者たちは「啓典の民」というクルアーンの思想を巧みに展開して、ユダヤ教徒とキリスト教徒を保護民として支配下におくと同時に、イスラーム以前から居住していたゾロアスター教徒などの多神教徒も、インドや中国からやってきた仏教徒やヒンドゥー教徒などまでも「保護民扱い」として共存体制を築いていました。そのため、イスラームの支配地域には、さまざまな宗教や民族があふれており、周辺諸民族や諸文化との共存を推進する政策を打ち出すことができ、融合的な文明が形成されていったのです。キリスト教を奉じるビザンティン帝国とも使節を交換するなど、十字軍運動が起こされるまでは、総じて友好的な関係が築かれていたのです。そのようなイスラーム世界にとって、これまで隣人であったキリスト教徒の一群が、遠い北方の地域から襲いかかってくるとは、予想を超える驚愕の事態であったのです。

十字軍は聖地エルサレムを奪回するという目標を掲げてはいましたが、宗教的情熱よりも、当時のヨーロッパにおける政治的矛盾と社会的混乱の解決法として、世俗的な目的のために結成されたことは、今日では明らかです。しかし、200 年にわたって展開された十字軍運動は、キリスト教徒にもイスラーム教徒にも、互いに敵意と偏見を植えつけるには十分過ぎるくらいでした。十字軍遠征の回数には諸説ありますが、1099 年の第一回から 1270 年の第 7 回まで行われたとされています。ほぼ 200 年間に亘った十字軍は、第 1 回こそ十字軍側の勝利となりましたが、その後はすべてイスラーム側が勝利しています。

十字軍の遠征については、ヨーロッパ側とイスラーム側の双方に十分な歴史的資料が残されていますが、同時代のアラビア語史料には「サリービーユーン（十字軍）」という言葉はほとんどみられず、代わりに「フランク人」、つまり西ヨーロッパ人という言葉が使われていました。当時のムスリムにとってキリスト教徒はユダヤ教徒とともに「啓典の民」としてムスリムの隣人であり、敵とはみなされていないからです。本来、イスラーム治下では保護民であったキリスト教徒が、遠くから十字軍として襲ってきて略奪や虐殺を繰り返したことは、ムスリム側にキリスト教徒に対する不信感や不寛容の意識を増加させるようになり、そのトラウマは現代でも消えていないのです。

過激派集団の「イスラーム国」が欧米とそれに参加する有志連合の国々を「十字軍」と呼ぶのは、このような歴史的経緯を踏まえてのことなのです。

次に発生した大きな戦争は、イベリア半島を舞台にした「レコンキスタ」です。レコンキスタ（711～1492）はキリスト教国家による国土奪回運動とされています。

前にも述べましたが、当時のウマイア朝の軍勢は711年にイベリア半島に遠征して領土を獲得していましたが、ウマイア朝が滅亡した後に、ウマイア朝の末裔がアンダルスのコルドバを都として政権を樹立し、後ウマイア朝を開きました。その後、王朝は次々と交代しましたが、1492年に最後のナスル朝の首都グラナダが陥落するまでの約800年間、イベリア半島には華麗なイスラーム文明が咲き誇りました。



ウマイア朝によって706-15年に建設された  
ダマスカスのウマイア・モスク

キリスト教徒の領主たちが、これらのムスリム支配から領土を奪還していく運動がレコンキスタと呼ばれ、国土回復運動とも呼ばれます。キリスト教徒は8-9世紀にイベリア半島北部に諸国家を建設し、これらを統合、合体、分離を繰り返しながら南部に侵入したイスラーム勢力と戦い、領土を拡大していったのです。レコンキスタの成功の要因は、当時のキリスト教世界で発生した宗教的情熱が契機となり、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼と関連しています。一方のイスラーム側は、まさに東方での第一回十字軍の遠征時と同じように、宗教的情熱とムスリムとしての一体感が薄れており、スペインでのキリスト教徒、ユダヤ教徒、ムスリムとの共存に安心して油断していたようです。

レコンキスタ後、スペイン王権はカトリック信仰に基づく国家統一をめざし、直ちにすべてのユダヤ教徒にキリスト教に改宗して洗礼を受けるか、4ヶ月以内に国外退去しなければならないとして、ユダヤ教徒迫害を開始しました。その結果、15万ないし20万人のユダヤ人がイベリア半島を去ったといわれています。

## 7 「共存」の意味・・・イスラーム理解の第一歩を

現在のイスラームフォビアにも、十字軍やレコンキスタの時代と共通する意識があるように思えます。それは、今日のイスラーム教徒の急激な増加に対するキリスト教世界からの反感と恐怖感だけでなく、イスラーム世界がヨーロッパに先駆けて輝かしい融合文明を立ち上げ、今日の科学技術の基盤を築いたことを認めたくないという劣等感の裏返しと、その後、イスラーム科学を取り入れたヨーロッパが発展して現代文明の主体となったという、優越感からくる差別意識の両方が指摘されます。

イスラームフォビアの中には、「アルカーイダ」や「イスラーム国」などの過激派集団の戦闘行為の要因として、「イスラームは本来的にテロや暴力を容認するという思想がある」と主張する意見もあって、その解釈は「わかりやすい」としてもはやされる傾向があります。しかし、暴力的で戦闘的な行為は、特定の条件下ではどの宗教集団にもみられるものです。「イスラームは本来的にテロや暴力を容認する」宗教だから、ムスリムが世界のあちこちでテロ行為を行ったり、「イスラーム国」などという野蛮な集団が台頭したりするのだ、という主張は、かえって問題の解決を遠退けることになるのです。とくに現在の紛争には、アフガニスタン空爆からイラク戦争にいたる国際政治や、石油や天然資源にまつわる経済の力関係によって生じた国際関係上の分断政策にこそ、大きな要因があるのです。

しかし、別の視点から考えると、もともと宗教的・精神的次元だけでなく、日常的、社会的、経済的、国際的な次元をも含んだ総合的な宗教として展開してきたイスラームでは、純粋に宗教と政治を

切り離すことはできません。「イスラーム国」のように、クルアーンに厳しい条件付きで述べられている「戦え」「殺せ」という命令を、彼らに有利な極端な解釈に基づいて文字通り戦争やテロ行為への命令として受け入れる集団が台頭してくることも、否めないのです。しかも、イスラームだけでなく、どの宗教にも、多種多様な解釈が可能であり、偏った過激な解釈であっても、それだけで単純に排除することはできません。宗教が政治や経済面で利用されるという問題は、決してイスラームだけの問題ではありませんが、ムスリムが関わる事件は、ことさらに大きく報道される傾向がありますので、イスラームに対する偏見はいつまでたっても解消されることはありません。

過去の十字軍時代にも西洋キリスト教世界からは、イスラームと暴力は意図的に結びつけられて非難のプロパガンダに用いられていました。「右手にクルアーン、左手に剣」という標語は、まさに十字軍時代に用いられはじめた悪意に満ちた宣伝文なのです。

現在の世界では、主にシリアやイラクで、ムスリムの一般人、特に女性や子供に、正規軍と非正規軍の双方の戦争によって、数多くの犠牲者が出ているにもかかわらず、ムスリムの人々はテロリストの側に擬せられ、その死は世界から悼まれることは少ないのです。今日、「テロリスト」という言葉は、現実を無視してあまりにも容易に使われています。しかも現実を無視することは、さらに新しい殺害へとつながる恐ろしい連鎖を招く第一歩になるのです。

その「現実」とは、ムスリムとキリスト教徒の間に、パレスティナ人とイスラエル人の間に、シリアやイラクの人々と有志連合の兵士との間に、「人間としての命の価値」の格差が大きすぎるということです。現代の世界の危機の最大の原因は、まさにここにあると考えられます。また、一般に中東の紛争や危機の要因として、「宗教」「石油」「政治的権力」「経済問題」などが取り上げられるのですが、真の要因は「ムスリム蔑視」であるといわれています。イスラームという宗教を後進的で野蛮な宗教であるとみて、その信者であるムスリムの人びとに対して軽蔑の眼差しで差別的な対応をすることが、そもそもの要因であると考えられます。

その一例がパレスティナ紛争です。パレスティナ紛争は、ユダヤ教徒がローマ帝国によって約束の地を追われてから約 2000 年の後に「民なき土地に土地なき民を」というシオニズムのスローガンのもとに強引に独立させられたイスラエルに対する領土回復のための民族闘争です。「民なき」はずの土地には 2000 年の間にムスリム、ユダヤ教徒、キリスト教徒が平和裏に共存して住んでいました。このうちのユダヤ教徒を除く人々が「パレスティナ人」とみなされて、イスラエルと対立するようになったのです。パレスティナ人のなかには、古くからこの地に住んでいたキリスト教徒の子孫も含まれていることは、いまや、ほとんど無視されています。またパレスティナのキリスト教徒がムスリムと協働して被災者救助や難民救済活動を展開していることも、あまり知られてはいません。それは、パレスティナ問題がユダヤ教徒とムスリムとの「宗教対立」の構図で語られることが多くなったからです。民族闘争を宗教対立に還元することによって、解決への道は意図的に遠のけられたのです。

しかし、幸いにも世界には宗教の壁を越えて、宗教間の対話と平和的共存のために活動をする人々がたくさん、います。その中で少しユニークな学者を簡単に紹介します。

- ① **ハンス・キュンク** (1928～) はスイスのカトリック神学者で、カトリックの制度や教皇批判によって一時期、カトリック総本山から破門されたことがあります。1995 年以降、「地球倫理」を唱えて、地球倫理研究所長、チュービンゲン大学名誉教授を務めています。彼の主張は以下の言葉にまとめられます。

「宗教間の平和なくして人びとの平和はない、 宗教間の対話なくして宗教間の平

和はない、宗教の基盤についての研究なくして、宗教間の対話はない」

彼はビデオ「世界諸宗教の道」全7巻を監修して地球倫理を訴えています。キリスト教優位を主張せず、あらゆる宗教を平等にみる立場を堅持していますが、そのために度々ローマ教皇と対立してきました。

- ② **有賀鐵太郎**（1899～1977）は日本のプロテスタント神学者で神戸女学院院長なども務めました。「神と共に在る」という意味の「ハヤトロギア」の思想を打ち立て、諸宗教の対話を求める国際会議に日本代表として、度々参加しました。

彼の父親の有賀文八郎（1868－1946）はイスラームに入信し、日本のムスリムの先駆者となりました。晩年にはモスク建立資金のために私財を投じるなど、イスラームの日本定着に尽力しました。

- ③ **大久保幸次**（1887～1950年）は回教圏研究所の創設者で、日本のトルコ学の先駆者です。若い時期からトルコ人やタタール人との親交を深め、1936年には日土協会総裁の高松宮などの後援を受けてエジプト経由でトルコを訪れ、各地で講演を行ない、1938年に回教圏研究所を設立し、所長になりました。若手研究者を育てる一方で、トルコを中心としたイスラーム研究の組織化をはかりました。講演会などで「右手にコーラン、左手に剣という説は正しくない」と主張していた研究者で、近年、大久保の評価が高まっています。

- ④ **李卓吾**（1527～1602）は明代末の陽明学左派の学者で、イエズス会の宣教師マテオ・リッチと会い、相互理解を深め、著作『交友論』でリッチの人柄や能力を認めて高く評価しています。またリッチも李卓吾がキリスト教に一定の理解を示したことや幅広い学問に精通していることを書き記しています。彼が引退後に出版した『焚書』で朱子学を厳しく批判したために、周囲から危険思想と断定され、晩年は牢獄に閉じ込められ、獄中で自死したと伝えられています。近年の研究によれば、彼の遺書から、彼がイスラーム教徒であったことが明らかになったといわれています。幕末の吉田松陰が彼の著書『焚書』を獄中で読んで感銘を受けたことでも知られています。

## 8 現代のイスラーム・・・ムスリム女性の活躍

一般にイスラームは女性蔑視的で女性を差別する宗教であると言われますが、実際には現在でも多くのムスリム女性たちが、我が国の女性の社会進出度と比較しても遜色がない活躍をしています。さらにイスラーム初期の歴史的な事実を検証すると、預言者ムハンマドは自分の身近な女性を人間的に信頼し、彼女たちの意見を尊敬して聞いており、差別的な言動はとっていないことが明らかになります。たとえば、預言者が最初に結婚した女性ハディースは預言者より少し年上で、当時の貿易会社を経営する女社長という自立した女性でした。現在の視点でも、社会的に活発に活動していたエリート女性であり、ムハンマドはそのハディースが経営する会社の社員だったのです。ムハンマドの有能で正直な人柄を見初めて、彼女のほうから求婚したといわれています。

クルアーンは女性の地位を認めており、前述のように、世界で初めて妻の遺産相続権を確立しました。さらに、信仰上は男女差別などはないと強調していますが、これは当時の世界では驚異的な思想でもありました。

ムスリム女性が被るベールについて説明いたします。

一般に、髪の毛を隠すベールは、ムスリム女性の象徴とも言えます。世俗主義を掲げるフランスでは、ムスリムの女子生徒が公立学校でベールを被って授業を受けることが一定の宗教活動となるとして、ベールの着用を禁止する法律が採択されて、大きな問題になったことがあります。特にムスリム

女性のベールは、イスラームの象徴とも捉えられて、ベールを被る女性が多くいるかどうかという点で社会の宗教傾向が計られることがあります。

このような現象から考えると、ベールだけではなく、女性の袖やスカート丈の長い衣服などに代表される服装の厳格な規定は、クルアーンの中に非常に多く繰り返し出てくるのではないと思われるでしょう。ベールや長い衣というのは、女性が身を慎み貞節を守るために着用するようにと神によって命じられていると一般には信じられているのですが、実は、ベールに関する記述はクルアーンの中にはたった一箇所しか出てこないのです。

信者の女たちに言うがよい、視線を低くして貞淑を守れと。外に表われ出るもの他には、彼女たちの美しさや飾りを目立たせてはならない、そして、ベールをその胸の上にかけてなさい。

(24章 31節)

つまり、自然に外にもれ出るものは構わないが、その他は意図的に女性の美しさや飾りを目立たせてはならない、という規範です。「ベールをその胸の上にかけてなさい」という記述についても、どのようにベールをつければいいのかという具体的な方法については、クルアーンにはなにも指示がありません。

このような表現は他の宗教にもたくさんありますが、現代、それぞれの宗教の規範を文字通り実行するという人たちは少数派になっています。したがって、これらの記述はむしろ精神的な規範として把握されるべきであると思われる。イスラームでも、ベールは女性の貞節に対する決意と心の守りを表わすもので、必ずしも被らなければならないものではないと、考える女性もいます。

しかし、文字通りそれを身につけなければ正しいイスラーム教徒ではないといったような時代の風潮が見られるようになると、女性に対してさらに厳格にベールやイスラーム風の衣服の着方を強制してくるようになってきます。現在のイスラーム世界は、恐らくイスラームが発祥してから 1400 年の歴史の中で、最も厳格な規範遵守が要求される時代になっているように思われます。

このようなベールや黒いマントなどを被り身体の線を隠してしまうということは、女性が自らの貞節を守るためのものではなくて、本来は男性のほうが女性の姿を見て誘惑されないように、つまり、実際には男性を守る方針の一つとして採用されたものだという説もあります。しかし、このような規定が、長い歴史の経過のうちに、それぞれの社会の伝統や風習と結びついて、本来イスラームとは全く関係のない文脈の中で展開をし、また重複してさらに厳しくなり、女性を苦しめる要因ともなっています。



思い思いのベール・ファッションを楽しむカイロ大学の女子大学生たち

特に今日、世界的に宗教復興運動や伝統回帰が強まってくると、日本人でイスラームに入信する女性たちは、ほとんどの場合、入信するや否やただちにスカーフを巻いて化粧も落として現れてくることとなります。ムスリムの女性が化粧をしてはいけない、という決まりはなく、実際にはベールを被っても、美しく化粧をしている女性も中東にもアジアにもたくさんおり、衣服も色や形に意匠をこらしてきれいに装っているのですが、

遠い日本などで宗教に目覚めた人たちはとりわけ教条主義的になり、なかには非常に熱狂的な信者になって、たちまちイスラーム的な服装をし、イスラーム的な生活を守ろうとする場合が多いようです。そのために、特にイスラーム圏以外の世界では、女性がベールをしているか、していないかというの

がムスリムであるかないかを見分ける大きなポイントになってきています。

一見、保守的にみえるイスラーム社会でも、最近是因習的な女性虐待などの事例は急速に減少し解消されてきています。特に都市居住者の間では、私たちが考える以上に女性の社会参加が進んでいます。

たとえば、サウディアラビアでは、男女の社会的空間が分かれているために、女性の世界で女性のために働く人が必要になります。医者、看護師、教師、銀行家、証券アナリスト、店員、美容師、などいろいろな職場で女性が働いています。よくサウディアラビアでは女性は働いていないといわれますが、人口の半数は女性ですから、外部から見えにくいだけで、高学歴の女性を中心に女性の世界で社会進出を果たしています。欧米へ海外留学をして帰国した女性も多く、国内には国立・私立の女子大学も増えてきて、高学歴の女性は結婚後も仕事をやめることはありません。

その理由としては、各地で貧富の差という深刻な問題があります。ちょうど日本の「おしん」の時代のように、子守さんとして裕福な家庭に入って、家事や赤ちゃんの世話をする貧困層の女性の存在があります。つまり、高学歴の上流階級の女性が社会進出をするのを、家事労働によって助ける低所得層の女性たちがいるのです。湾岸地方の産油国で家事労働に従事する女性の多くは、アジアの国々から出稼ぎにきています。そういう社会の二重構造があるために、イスラーム社会では女性の社会進出計数は統計に表れる数の二倍から三倍だと思ってもいいかもしれません。このような貧富の差による社会の二重構造は急速に解決されなければなりません。しかし、イスラーム社会では私たちが思っている以上に女性が活躍をしているということを忘れてはならないと思います。

厳しいイスラームの規律（イスラーム法）、地域社会の伝統や習慣、それぞれの家庭の考え方という二重、三重の非常に大きな抑圧の中にあいながら、女性たちは実に生き生きと社会の中で重要な役割を担っているということができるといえるでしょう。

現実には、クルアーンの教えの下に生きる女性たちの中にも、日本以上に社会で男性に伍して生き生きと活躍する女性も少なくありません。イスラーム世界の女性像を考えることは、翻って我が国の男女観を反省することにも繋がるでしょう。

## 9 仏教者の対話努力・・・峯岸正典師の場合

日本人の多くは、第二次世界大戦中の国家神道の失敗によって大きな痛手を受けた苦い経験から、宗教そのものに対して一種のアレルギーを持っているようにみえます。宗教と国家の結びつきによる最悪のケースを経験したことによって、人々は特定の宗教的態度を避けるようになったといわれています。その結果、日本で公的な場面では、ほんの少しの宗教的な匂いさえも、直ちに避けようとする傾向がみられます。政教一致の観点は言うまでもなく、公共の教育現場や芸術にさえ、宗教の影は排除される傾向があります。そのような宗教的環境の下にある日本では、神の道に身を捧げるという大義名分のもとに自爆テロを決行するムスリムの若者たちの姿はどのように写るのでしょうか。イスラームにおいても、現今の政治的混乱と宗教的教義とは、全く別の次元で考えなければならないのですが、戦闘的なイスラーム集団のテロ事件の報道に接する日本人の多くが、イスラームに対する嫌悪感や拒絶意識を持ったとしても、それを単なる誤解だとして非難することは、難しいのです。

世界中で多くの紛争が絶え間なく発生し、各地で貧富の格差が広がり、命の価値の差異が拡大する今日、新たな挑戦として、日本の仏教や神道とイスラームとの対話を成功させることは、日本だけでなく、世界におけるイスラームに対する偏見や無理解を取り除くことにつながります。宗教間対話は何度開いても効果が乏しいという意見もありますが、いかに効果が限定され困難であっても、宗教間



対話を継続することが重要であると、私は考えます。

ここで、仏教徒の手による宗教間対話運動の一つを紹介します。群馬県にある曹洞宗長楽寺の住職である峯岸正典師は、2006年に長楽寺に事務所を置かたちで「宗教間対話研究所」を開設し、精力的に月例の対話セミナーを重ねています。彼は仏教寺院の後継者としては珍しく上智大学文学部哲学科に学び、ベネディクト派の修道院での修行まで体験しています。この経験から、「東西霊性交流」を掲げて、各界各宗派から知識人を招聘して、共に学び意見を戦わせる場を設けたと語っています。彼の魂を込めた活動によって、長楽寺は世界中から多くの宗教家が訪れる「対話の場」となっています。この研究所について、峯岸師は2016年に開催されたアシジ会議「平和への渴望」(Assisi 30 Thirst for peace, Panel 3)

で次のように語っています。

こうした経験も励みとなって、私は10年前、自分のお寺に宗教間対話研究所を設立いたしました。宗教間対話促進の必要性に鑑み、先達の学識に学び、それを社会に反映させることが必要だと考えたからです。特定の機関の働きかけによって設立されたものではありません。紛争の根源に宗教の違いがあるといった、社会の一般的な見方が是正され、異なった宗教間で誤解に基づく争論が起きないように提案していくことを課題としています。

この研究所の月例会では、イスラームに関する研究発表や対話は2016年8月までに19回に及び、ユダヤ教についても6回の連続講義が行われました。仏教家の多くが一神教やイスラームを、峯岸のように寛容な態度で理解しようとしている訳ではありません。前にも述べましたが、むしろ、仏教家の中には、一神教について「父性の神を仰ぐがゆえに、その疲弊した魂をいやす役割をはたすことができないでいる」として、一神教世界観を批判することが多いのです。

しかし、今日、急激に変化する世界においては、互いに批判しあうのではなく、それぞれの思想を、偏見を排して客観的に学ぶことは重要なことであると峯岸師は考えています。このような立場から「東西霊性交流」は時代の希求としての宗教間対話であるとして、自らの経験を踏まえて次のように言っています(「東西霊性交流—時代の希求としての宗教間対話—」『現代社会と宗教』愛知学院大学国際研究センター叢書4、2013年、185-198頁)。

およそ異質なものと触れ合わない限り、組織はよどんでいくものと一般的に言われている。修道士と禅僧という違った立場に立つ者同士の交流は教団という組織に生きる者に、自分たちの足元を見つめなおすきっかけを作ると言えよう。

・・・宗教の違いは教義の違いとなり、教義は異なった宗教に属する人々を分断し、対話において共通の分母を持つことをまだ許してはいない。だからこそ、異なった宗教間の出会いと対話が新しい時代のパラダイムを開く可能性を持つ。

こうして峯岸師の研究所では、キリスト教だけでなく、イスラームやユダヤ教、その他の宗教の研究者や宗教家を招聘して、毎月一回の研究会在滞ることなく、実施されています。研究会に集まる人々も仏教家をはじめ、新宗教の導師や宗教学の研究者や学生、ジャーナリスト、文筆家など、実に多彩です。

## 10 差異を乗り越えること・・・ムスリムとの共存を目指して

日本ではイスラーム教徒数もまだ少なく、イスラーム研究者の人数も限られています。幸いにも、いまだ欧米のような社会生活上の大きな問題は生じていませんが、少数者の宗教であるという理由だけでイスラームを客観的に学ぶことを避けてはならないと思います。世界史的な視点から、急増するイスラーム教徒の勢力を考えると、「人間はすべて森羅万象と同様に神の被造物であり、すべて平等である」というイスラームの世界観の理想が、やがて欧米中心のグローバリゼーションにとって代わる時代がくる可能性があるでしょう。しかし、それは、今よりも深刻な問題を乗り越えた後に来る時代のことかもしれません。

同一の社会の中でのよりよい共存のためには、それぞれの宗教の教義などあまり知らなくても人格的な交わりが重要であると「非ロゴス的対話」を強調する立場もあります（鎌田繁「イスラームの知と宗教間対話の意味」『グローバル時代の宗教間対話』67-74頁）。それぞれの教義や思想について専門的に学ぶ機会がなくとも、人間同士としての平和な日常的なつきあいを行なうことも、もちろん、重要なことです。私もこの立場を否定するものではありませんが、同時に、それぞれの思想を、偏見を排して客観的に学ぶことはさらに重要なことであると考えています。

エジプトのムスリム同胞団の創始者ハサン・バンナーの孫でもあるターリク・ラマダーン（現オックスフォード大学教授）は「神とともに在ることは、人類とともに在ることである」として、これを「タウヒード」（神の唯一性、つまり一神教のこと）の本来の意味であると説明しています。このタウヒードは、四つの次元を持って展開していますが、まず、家族との関係から始まり、つぎにイスラームの基本的な義務行為である「五行（信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼）」の宗教的儀礼を実行することによって集合的側面を持つことになり、信仰者はすべてひとつの信仰共同体「ウンマ」に所属することになります。第三にこの信仰共同体は「信仰告白」シャハーダによって結ばれる「信仰、感情、同胞、運命の共同体」のウンマとなります。すべてのムスリムは個人として信仰に入るが、同時にひとつのウンマの成員としての義務を負うことにもなるのです。さらに第四の次元にいたると、ウンマは、ムスリム以外の全人類に対しても、あらゆる状況下において正義と人間の尊厳の側に立つことによって、みずからの信仰について告白（シャハーダ）する義務を負うことになります。ラマダーンはムスリムが全人類に対して正義を行なうという原則が、タウヒードの実践であり、ムスリム共同体全体の任務を真に理解することに基づいていると主張しています。

このような「共存」を、ラマダーンは伝統的な「イスラームの家」と「戦争の家」という区別から、「告白の家」へと転換をはかるための鍵概念であるとしています。それは、ムスリムがみずからの信仰を告白し、それに忠実であることが、「共存」の第一歩であるという立場だと考えられます。

彼は、さらにヨーロッパに住むムスリムにとって、もっとも重要な課題は市民としての立場、シティズンシップであるとして、ムスリムの側からは、移住し共存して住む運命にある土地・国家・都市への忠誠を守ることを、ヨーロッパ社会の側からは、ムスリムにシティズン（市民）としての平等な権利と義務を与えることを要求しています。ラマダーンのいう「共存」は、あらゆる差異を超越するという考えに似ているかもしれません。

『パリのモスク ユダヤ人を助けたイスラーム教徒』（彩流社、2010年）という小さい児童書があります。これは第二次世界大戦の末期、ナチスからユダヤ人を含む1732人（うち子供約400人）を救ったムスリムについて書かれた本です。1940年から44年にかけて、パリはナチス・ドイツに占領され、ユダヤ人はいつ捕まるかという恐怖のうちに暮らしていました。ドイツ人以外のすべての人々が、自由を制限されて恐怖のうちに暮らす中で、「この子たちはわが子も同じ」と言ってユダヤ人をかくまい、

危険なパリから脱出させるため命がけで力をつくした人々がいました。それはパリの大モスクに集うアルジェリア出身のムスリムたちだったのです。この事実は、2005年になるまでほとんど語られることがありませんでした。それは、ユダヤ人とレジスタンスの人々を救ったムスリムたちも、救われた人たちも、長い間、固く秘密を守っていたからでした。この本は、実際にモスクで救われた人たちが、イスラーム教徒のユダヤ人救出活動に光をあて、その勇気と信念、献身を讃えるために書かれたものです。

皆様は『オリエンタリズム』の著者として有名なエドワード・サイード（1935～2003）をご存知でしょうか？彼はイギリス委任統治下のパレスティナ生まれのキリスト教徒で、アメリカで大学教育を受けた後、コロンビア大学で英文学と比較文学の教授として働きましたが、2003年に白血病で惜しまれながら亡くなりました。西洋の非西洋（アジア、アフリカ、中東）に対する態度を蔑視的であるとして非難した『オリエンタリズム』の出版は世界的に大きな反響を呼びました。また、自らをパレスティナ系ユダヤ人と称して中東紛争の解決のために奔走しました。存命中にユダヤ人の指揮者ダニエル・バレンボイムとともに、イスラエルとパレスティナの若者で結成したウエスト・イースタン・ディヴァン楽団は現在も世界中でパレスティナの平和を訴える演奏会を開催しています。日本の小説家、大江健三郎との交流でも知られています。

それでは、私たちにできることは何でしょう？イスラームに関して「差異を乗り越えること」とは、クルアーンのテーマを理解することから始まると思います。クルアーンの主要テーマは「人の生命を救う者は、全人類の生命を救ったのと同じである。」(5:32)であり、キリスト教の聖書のテーマと異なるものではありません。ユダヤ教、キリスト教と同じ伝統上に最後に発祥した一神教として、この3宗教は相互に緊密な関係があり、ウマイヤ朝からオスマン朝に至るまで、イスラーム支配下で実現した「啓典の民」という共存システムは、歴史の過程では不穏な時期があったものの、概ね機能的に運営されてきたのです。過去にできた相互理解と共存体制は、現在の私たちの世界でも不可能ではないと、私は思います。

現在のように通信技術が進歩した時代にあっても、欧米の政権やメディアによるイスラームに対する短絡的な誹謗中傷は、止むことがありません。それは、人々の相互理解を妨げ、世界の平和を脅かすものです。日本は、イスラーム諸国との間に歴史的軋轢を持たない、唯一の先進国です。現在でもイスラーム諸国からは、「第二次世界大戦で欧米を相手に勇敢に戦った、敗戦後は驚異的に復活した、科学技術に優れている、礼儀正しい、正直である」などの点で、世界中で最も尊敬される国なのです。その親日ぶりは、時として、こちらが恥ずかしくなるほどです。

いまや世界で3人に一人という勢力を持つイスラームについて、平和的な共存を進めるために私たちにできることは、難しい作業ではありません。その一つは、欧米のメディアによる歪曲されたイスラーム観や、地域的な政治的内紛や民族紛争に関する一方的な判断を避けるために、イスラームについて正確な知識を持つことです。また身近なところにムスリムがいたら、遠慮なく話しかけ友人になってみることも重要だと思います。イスラームでは基本的に宣教活動を行いませんので、モスクの見学に行くと、入信を勧められるということは、ありません。近くにモスクがあれば、見学に行ってみることもお勧めいたします。

私たちは一神教と多神教といった枠を作ってしまうことなく、人間としての共通性を基盤として、イスラーム世界と日本との対話を続けていきたいと願います。お互いに良く話し合い、理解しあうことは、効果的な宗教間対話を実施し、グローバル化したこの世界に平和的な共存関係を築き上げるために、極めて重要なことであると確信しています。

## 「イスラーム理解と平和的共存」に関する参考資料（出版年順）

### 塩尻の著作・共著

- ・共訳『聖戦の歴史』アームストロング著、塩尻・池田訳、柏書房、2001年
- ・共著『イスラームの生活を知る事典』塩尻・池田著、東京堂出版、2004年
- ・単著『イスラームを学ぼう―実りある宗教間対話のために―』秋山書店、2007年
- ・単著『イスラームの人間観・世界観』筑波大学出版会、2008年
- ・監修・共著『図解宗教史』塩尻・津城・吉水監修、成美堂出版、2008年
- ・単著『イスラームを学ぶ』（NHKカルチャーラジオ歴史再発見）NHK出版、2015年
- ・編著『変革期イスラーム社会の宗教と紛争』（明石書店）2016年
- ・共著『宗教と対話』小原克博・勝又悦子編、教文館、2017年

### その他の研究者の著書

- ・『地中海世界のイスラム』モンゴメリ・ワット著、筑摩書房、1984年
- ・『イスラーム誤認』板垣雄三著、岩波書店、2003年
- ・『イスラムと十字軍』（文明の道4）NHK出版、2004年
- ・『イスラーム化する世界』大川玲子著、平凡社、2013年
- ・『イスラームの深層』鎌田 繁著、NHK出版、2015年
- ・『「イスラム国」はテロの元凶ではない』川上泰徳著、集英社新書、2016年
- ・『シャルリとは誰か』エマニュエル・トッド著、堀茂樹訳、文春新書、2016年
- ・『イスラームを読む』小杉泰著、大修館書店、2016年
- ・『イスラーム主義 もう一つの近代化を構築する』末近浩太著、岩波新書、2018年